

## ヘミングウェイの短編小説作法 —— “Up in Michigan”

前 川 利 広\*

(平成4年10月30日受理)

### 要 旨

“Up in Michigan”はヘミングウェイが青春を過ごしたホートン・ベイを舞台にし、そこに実在した人々をモデルにして書かれたものである。これまでの批評ではこの執筆時期の特定が不正確であったため、物語の着想と文体の評価について誤解を生んでいた。最近の研究から新たにわかった事実を根拠にしてこのストーリーを読み直すと、これまでとは違った解釈が可能である。ここでは創作の技術という観点からこの作品を検証し、再評価を試みる。

### KEY WORDS

Horton Bay    ホートン・ベイ    Gertrude Stein    ガートルード・スタイン  
Pauline Snow    ポーリー・スノウ    Sherwood Anderson    シャーウッド・アンダーソン

### 1

“Up in Michigan”はアーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) のストーリーのなかで最も早い時期に執筆され、世に出たもののうちのひとつである。これは“Out of Season”, “My Old Man”の2つの短編小説とともに *Three Stories and Ten Poems* のなかに組み込まれて「1923年夏(おそらく7月)」(Hanneman 5)に出版され、この作品集はヘミングウェイの最初の本となった。それにもかかわらず、この短編小説を批評の対象として、そのテーマや人物像、創作方法などをまともに論じる評者の数は少ない。とりわけニック・アダムズの物語の批評の多さと較べてみれば、その差の大きさに異様なものを感じるのだが、この事実こそこの作品に対する研究者の見方の一端が伺えるともいえる。

ホートン・ベイ (Horton Bay) はミシガン半島北端に近いシャルルボア湖畔にある、小さな小さな町である。ヘミングウェイがハドレイ・リチャードソン (Hadley Richardson) とこの教会で結婚式を挙げたのは、1921年9月3日のことであった。それからほぼ3ヶ月たった12月8日、ヘミングウェイはシャーウッド・アンダーソン (Sherwood Anderson) に書いてもらった紹介状をふところに、新婦とともにニューヨークの港からフランスに向かう船に乗り込んだ。このときヘミングウェイの荷物のなかには、まだ手を加えなければならない状態のままの、“Up in Michigan”の原稿が含まれていたという (Reynolds, *The Young Hemingway* 259)。

ヘミングウェイの当初の目的地は、フランスでなくイタリアであった。それをフランスの、それもパリに変更したのは、アンダーソンの強い勧めがあったからである。当時フランスにお

\* 言語系教育講座

いてアメリカのドルはその交換レートが有利であった (Reynolds, *Hemingway: The Paris Years* 15-16, 162)。しかしそのことはともかく、アンダーソンがいうには、パリには作家を目指す若者に都合の良い条件が揃っていた。シルヴィア・ビーチ (Sylvia Beach)、ジェイムズ・ジョイス (James Joyce)、エズラ・パウンド (Ezra Pound)、ガートルード・スタイン (Gertrude Stein)、パブロ・ピカソ (Pablo Picasso) らがいたので、援助と助言が得られるように彼らすべてに紹介状を書こうとのことであった (Reynolds, *The Young Hemingway* 259)。

パリでは実際にヘミングウェイは彼らの多くと交際を持つことができた。まだアメリカにいた頃シャーウッド・アンダーソンから受けた影響も見逃すことはできないが、パリでの交際によって施された「教育」は相手次第でさまざまに深淺を持ちながら、のちの作家ヘミングウェイの誕生に貢献するところ大であった。特にパウンドとスタインがヘミングウェイの文体に参与したと考えられることのなかに看過しえないものがあるのは、ほぼ定説になっているといえるであろう。しかしそれらの影響を強く思い込むあまり、なかには思いがけない誤解が生じなかったわけではない。

## 2

“Up in Michigan” に描写されている出来事は、異色である。5 世帯しかないきわめて小さな町ホートンズ・ベイ (Horton's Bay [下線筆者]) の蹄鉄工ジム (Jim Gilmore) は、暴力的といえないこともない仕方ですミス家の店に働く若い女性リズ (Liz Coates) と肉体関係を持つ。それに加え、筆者の視点が努めて筆者自身の経歴からつきはなされていることは、自伝的要素を色濃く残したニック・アダムズの物語に馴染んでいる読者にとって意外である。ことに視点を女性に置いたことは、ヘミングウェイの創作の技法の発展を考えると、この作品の意味が決してなおざりにはできないものであると感じさせる。

この作品を論じるものの多くは、ヘミングウェイがこのような主題を物語ることのなかに、(1)シャーウッド・アンダーソンの *Winesburg, Ohio* の影響、あるいはその模倣の気配を感じとった。そして、(2)ガートルード・スタインの文体の臭いを嗅いだ。そのような見方をした評者の典型的な例が Charles A. Fenton である。

His own work began to reflect the method. It was particularly apparent in “Up in Michigan,” which can be regarded as a transition piece; the story is a blend, in a very loose way, of his joint obligation to Anderson and Stein. (152)

この作品にアンダーソンの影響を感じとったということは、町の住民を描写するという文学形式がアンダーソンの方法に似ていたということである。また批評家達がヘミングウェイの文体にスタインの臭いを嗅ぎとったというのは、スタインの文体に近いものを見つけたと彼らが思い込んだということである。

Carlos Baker は “Up in Michigan” の執筆時期を「1921年12月、パリで」(*The Writer as Artist*, 135) と考えた。Arthur Waldhorn も “His [Hemingway's] clearest debt is stylistic. . . . Twice in “Up in Michigan,” he consciously imitates the device of repetition Miss

Stein had used in *Three Lives* to stress and clarify emotion”と述べて、この作品が書かれたのはパリに渡ってからであるとしている(43)。Alice Hall Petryにしてもこれらの考えを踏襲し、執筆時期は「1921年12月」と考えている(353)。しかし Reynolds はそのような見方に重要な修正を施し、スタインとアンダーソンの影響についてこう述べる。

Later the critics would find innumerable sources for Hemingway's early work. Gertrude Stein and Sherwood Anderson would get most of the credit, which obviously is partially true. But in the fall of 1919, Hemingway had not read Anderson, and he was two years away from Stein and Paris. Their influence is real, but it was not first. (“Looking Backward,” 4)

ヘミングウェイが“Up in Michigan”を執筆した時期を1921年12月——つまり彼のパリ滞在が始まったばかりの頃——と考えた評者達は、Waldhorn がそうであるように、一致してヘミングウェイの文体に紛れもないガートルード・スタインの影響を見たように思った。しかしこれがそうでないことは、ビル・スミス (Bill Smith) のヘミングウェイ宛の手紙で明らかになる。<sup>1</sup> ビルはヘミングウェイとともに北部ミシガン州において多くの時間を共に過ごし、青春を謳歌した親友であり、ヘミングウェイと同様、作家になることを考えていた一時期を持つ。ビルは手紙のなかで、彼らが夏を過ごした土地の人々のことについて、共同でスケッチを書いてみようではないかと提案する。彼ひとりでは形式について考えあぐねるところがあり、改良する案を求めて、ヘミングウェイに自分の拙い創作を送った。それはいかにも土地の人々の語り口調の雰囲気を出すためか、故意に不正確な語法を多用したものである。

勿論この手紙におけるビルの提案だけが、スケッチ形式を採用入れることになる唯一の要因であったとするのでは、いささか根拠としては不足している。そこで Reynolds は、その後さほど日をおかぬうちにビルからヘミングウェイに宛てて書かれた次の手紙に言及する。その中でヘミングウェイとビルのふたりがサタディ・イヴニング・ポストに連載されていた E. W. Howe の“The Anthology of Another Town”を話題にしていることから、Howe の影響は確実にあったと考えられ、Howe のスケッチの例を3つ載せている。

1920年1月までにヘミングウェイはホートン・ベイのスケッチを8つ仕上げ、“Cross Roads”というタイトルをつけた (Reynolds “Looking Backward”, 5)。これらのスケッチが Howe のものと非常に近い形式と性質のものであり、特にそのなかに“PAULINE SNOW”と題されたものがあることは興味を惹く。

### 3

“Up in Michigan”の作品の出版に関して若干の紆余曲折があったことは、よく知られた事実である。まずヘミングウェイがこの原稿を完成させたのは、1922年2月とされている (Smith *A Reader's Guide*, 3)。さっそくスタインに読んでもらったところ、その性的描写のきわどさのため出版できないものだという主旨のことをスタインはいったという。<sup>2</sup> はたしてその年、原稿は「ほこりを被って」(Baker *A Life Story*, 103) いたが、翌年 *Three Stories and Ten*

*Poems* のなかの一編として日の目をみたことは冒頭に述べたとおりである。

性的描写が直接的過ぎることはそのひとつの問題点であった。だがそのことより興味深いことは物語の舞台が明瞭に特定できたこと、それに登場人物の名前を実在の人物から無断借用していたことである。舞台となったのはホートン・ベイ、町と呼べるほどの住民がいたわけではない。町の名前はこの土地にもっとも早く住み着いたもののひとり、サミュエル・ホートン (Samuel Horton) に由来している。ホートンは1856年この地を定住の地と決めて移り住んできたが、ここに来る前はオハイオ州に住んでいたカナダ人である。当時ホートン・ベイは豊かに広がっていた周囲の森林から木を切り出し、製材したのちよそに運び出すようになり、交通量もふえて徐々に住民の数がふえていった。一時期にはレストランが3軒開店し、それぞれが料理の腕前を競うほどに栄えたこともあるのだが、木材が取り尽くされてから製材所も廃業に追い込まれ、ふたたび寂れていった。(その製材所の跡地はヘミングウェイの短編小説“The End of Something”において背景として使われている。) まだそこまで時代が進む前、住民の数がわずかであった頃、数名の有志たちはなんとかホートン・ベイをよその町並みに発展させようとした。その対策のひとつが郵便局をおく資格を得ることであった。誓願書を提出したのが1879年、このとき名前をホートンズ・ベイ (Horton's Bay) にしたという。しかしいつの頃からかアポストロフィー・エスが抜け落ち、ホートン・ベイ (Horton Bay) になってしまった (Ohle 1, 30-31, 69 ff)。

“Up in Michigan” において町の名前がホートンズ・ベイになっていることは、すでに述べた。ただしヘミングウェイはどういうわけかアポストロフィーを脱落させ、“Hortons Bay”と表記している。このことについてこの作品の評者のなかにはっきりした説を提示しているものはいない。だがこのことは、登場人物について実在の人間の名前を作品の中で使っていることと無関係ではない。

主たる登場人物はジム・ギルモア (Jim Gilmore) とリズ・コーツ (Liz Coates) の二人である。ジムはカナダからやってきてホートンから鍛冶屋を買い取り、馬の蹄鉄を取り付ける仕事をしている。<sup>3</sup> 一方リズはどこから来た女性であるのか、作品中にその説明はない。スミス家の店で働いていると書いてあるばかりで、あとは彼女の身だしなみがいかにかこぎれいであるかということに人物描写の力点が置かれている。現実にはジムという名の男性も、リズという名の女性もホートン・ベイに存在した。そのためこの作品が出版され、それをヘミングウェイの姉が読んだとき、彼女はひどく憤慨したという。内容が女性誘惑という反モラル的なことであるだけでなく、ヘミングウェイ家とつきあいのある人たちがモデルになっていると思えたからであった (Sanford 216; Montgomery 122-23)。しかし Montgomery が述べているように、実在の人物と作品中の人物の間には大きな隔たりがあり、そこにヘミングウェイの作家としての意図が推し量られるのである。

Jim Gilmore という名前のうち、Jim は James Dilworth という実在の人物から借用したものであることに、間違いはないだろう。それに対してヘミングウェイは Gilmore という名をどこから思いついたものであるか、よくわからない。実在した Jim は、フィクションのなかのジムと同じようにカナダからやってきて鍛冶屋を営み、馬の蹄鉄を取り付けた (Ohle 77)。また実在のジムの身体的な特徴は、ストーリーのなかのジムの描写によく似ていたらしい (Montgomery 122)。しかしそれ以上の共通点は見いだせない。実在人物のほうは作中人物よりもはるかに温厚であり、子供達に好かれ、商才に恵まれ、良識ある住民として町の発展に寄与した

(Ohle 75-80)。ストーリーにあるような人物、肉体的欲求(食欲, 飲酒欲, 闘争欲つまり狩猟, 性欲, 睡眠欲)ばかりが盛んな人物とは、雲泥の差があったのである。

一方もう一人の主たる登場人物である Liz Coates についても、ほぼ同様のことがいえる。実在の人物として存在したのは Elizabeth Bewell という名の女性であったが、Coates という名の由来については、詳らかでない。Elizabeth Bewell はホートン・ベイに両親と住んでいたが、そのうちに James Dilworth と知り合い、結婚し、その後もここに永く生活した (Ohle 7)。その他の点については、Montgomery の説明が明快である。

Hemingway's sister, Marcelline, jumped to the conclusion that the "Liz Coates" of the story was inspired by Liz Dilworth, James Dilworth's wife, ignoring the physical dissimilarities between the two. Liz Dilworth was prematurely gray when Hemingway knew her and otherwise unlike the fictional character. (122)

肝心なことは、ストーリーの中のジムにしろリズにしろ、事実と嘘を混ぜ合わせてできた人物名であることである。その合成の仕方の露骨さは、ちょうどこの町の正式名である Horton Bay という地名を Hortons Bay に変えたことと、とてもよく似ている。このいくらか稚拙に思える技術は、たとえばこれからほぼ2年後に書かれた "The Battler" に見られるような、より高度な「事実の変形の仕方」とは一線を画すべきもののなのである。<sup>4</sup>

すでに軽く触れたが、ヘミングウェイはホートン・ベイの8つのスケッチを書いてそれらを "Cross Roads—An Anthology" と題した。これらは1920年1月にはすでに書かれていたのだが、明らかに習作の域を出ず原稿だけが残った。しかしヘミングウェイの創作のテクニクを跡づける意味では等閑に付すわけにはいかない。このスケッチのアンソロジーによって、彼はその後の作品のテーマ・形式・視点の手がかりを掴んだと考えられるからである (Reynolds "Looking Backward," 5-6)。この中の8つのスケッチのうち最初のものが "PAULINE SNOW" と題されたものであり、その内容は "Up in Michigan" の初期段階とでもいうべきものである。ポーリーン (Pauline Snow) はアート (Art Simons) に言い寄られ、夕食後デートをするようになった。ポーリーンは初めのうち恐れを抱いていたが、次第に景色を楽しむ余裕もできた。「とってもきれいな、アート？」と彼女はいった。

'We didn't come down here to talk about sunsets, kiddo!' said Art, and put his arm around her. After a while some of the neighbors made a complaint, and they sent Pauline away to the correction school down at Coldwater. . . . (Griffin 124)

最後にオチがついているところがいかにも E. W. Howe のスケッチの真似であり、のちの小説家としてのヘミングウェイなら決して使わないテクニクである。最後にオチがくるものの面白さは、いわば平明で俗っぽい面白さである。それは読む側に「解説する苦勞」を求めることなく、したがってそれに付随するたのしみも少なくなる。このことは結局もうひとつの特徴に結びつく。それは「文章の背景に潜む意味とそのカサ(嵩)の小ささ」である。ヘミングウェイの文体がほぼ確立したといえるまでにはまだ数年を要するのであるが、その真骨頂は簡潔な文体の裏に潜む意味の重みと嵩の大きさであることを思い起こせば、このスケッチはひっき

う素人の手すきびでしかなかったといえよう。それは必然的に人物描写の未熟さとも関係してくるのであるが、ポーリーンをリズと、アートをジムと比較すれば納得がゆく。そこで重要になってくることは、ポーリーンという作中人物のモデルである。彼女は実在の人物であったのだろうか、それとも創作であったのだろうか。そして実在の人物であったばあい、“Up in Michigan”のヒロイン、リズとの関係はなんであったのだろうか。

親友のビル・スミスからヘミングウェイに宛てた手紙 (Jan. 24, 1920) の中に、2名の女性の名が見える。そのうちの一人はマージ (Marge [Marjory] Bump) であり、すでによく知られているように、彼女は“The End of Something”のモデルであった。当時ヘミングウェイが彼女と交際していたことは既知の事実であるが、彼らのつきあいがどの程度のものであったのかはあいまいである。しかしこの手紙の文面から二人のつきあいはなにやら深刻な面を含んでいたことと、ビルがこの件に関して熟知していたらしいことは伺い知ることができる。手紙にあらわれているもう一人の女性の名はポーリーン・スノウである。手紙ではその名が見える部分の前後の事情がはっきりしないため、ヘミングウェイとの関係をあきらかにするまでにはいたらない。しかし彼女もマージと同様に実在の人物であったことには、疑問を差しはさむことはできないようである。

現存する“Up in Michigan”の原稿は、3通りである (Items 799, 800, 801)。<sup>5</sup> このうちItem 799だけが1921年12月以降、つまりヘミングウェイがパリに移り住んでからできあがったものであり、Item 800とItem 801はアメリカにいる間に書かれた (Smith Guide, 3)。これら二つの原稿のうち、Item 800のほうは6ページあって出版されたものはかなり近い内容を持つのにたいして、Item 801はわずか1ページのものであり、その内容は断片でしかない。それは4行からなる上段と10行からなる下段に分かれているが、それぞれの内容は連続していない。上段はジムが朝食をとりにやってくる時の様子から始まる。彼女がじっと彼を見続けると、ジムは恥ずかしさを覚えてそこにいたたまれなくなり、店のほうにいつてしまう。ここにはジムの思いがけないナイーブさが見られ、出版されたストーリー中のジムと比較すれば、二者の相違点は信じがたいほどである。それから2行あけて、下段は“Liz was frightened and sick when she got up to her room”から始まり、その内容はあきらかにジムと関係を持った（あるいは、強いられた）あとのリズの様子を描写したものである。<sup>6</sup> 出血を恐れてパッドを当てがい、羞恥心と後味の悪さを覚えつつ涙に泣きぬれ、眠りに落ちる。目覚めたときまだ夜はあけておらず、妊娠してしまったらどうしようと苦しむ。

見逃してはならないことは、これらの断片が、(1)ポーリーン・スノウを主人公としたスケッチの内容を補うものであるということ、(2)ジムの人物描写がアートの人物像と一致しているということである。これら2点の意味するものは、(1)“Up in Michigan”のヒロイン、リズのモデルがエリザベス (Elizabeth Dilworth) ではなくポーリーンという実在の人物であったが、スケッチからItem 801に発展してゆく過程でリズの名前に変えたらしいこと、(2)Item 801のなかのジムの名もジム・ディルワース (Jim Dilworth) から借りたものだが、彼の人となりは Art Simons の方により近いものであったのにたいして、“Up in Michigan”の登場人物である Jim Gilmore の人物像とはかなり相違することである。(ただしItem 799においてこれは大いなる変化を経て、食欲・性欲などの本能的欲求ばかりでできあがった人物像となる。)

## 4

“Up in Michigan”はその分量がわずか4ページでしかないにもかかわらず、単なるスケッチの域を超えて、一編のストーリーとして成立するに足る世界を備えている。その理由は人物描写のコントラストに面白味があること、そしてリズの内面が変化してゆく過程がたどれることである。

冒頭の二つのパラグラフは、ジムとリズのそれぞれについて、ホートンズ・ベイの住人としての描写がなされている。その後、二者の明確なコントラストが表明され、読者はその対比に著者の意図を探る手がかりを得ることができる。“He liked her face . . . but he never thought about her”(59). “All the time now Liz was thinking about Jim Gilmore”(60). リズの頭の中にはあたかもこの世にジムだけしか存在していないかのようだ。成熟した女性の感情からほど遠く、過剰にロマンチックな思いが伝わってくる。“Liz liked him very much . . . . She liked . . . . She liked . . . . She liked . . . . She liked . . . . She liked . . . . One day she found that she liked . . .”(59). ここには執拗に同じ表現が繰り返されているが、これを指してヘミングウェイはガートルード・スタインの教えを実行したと考える評者が多かった。その最初の例はFenton (153)に見られ、Waldhorn (43), Grebstein (79), Petry (354)らが続く。これらが思い込みの強さによる誤りであったことは、パリでなくアメリカで書かれた原稿 (Item 800) のなかにすでにこの箇所が見えることによってわかる。

ジムとリズのコントラストは、リズの少女趣味的思いによって強調される。ジムはスミス (Smith) やワイマン (Wyman) らとシカ狩りに行くことになるが、リズは“. . . wanted to make something special for Jim to take but she didn't finally because she was afraid to ask Mrs. Smith for the eggs and flour and afraid if she bought them Mrs. Smith would catch her cooking”(60). しかし純情で無垢なはずの彼女の関心は、プラトニックな領域に留まらない。男性にたいする性的な関心が次第に大きくなっていくのだが、彼女は自分の肉体の要求するところのものをしかとは認識できない。Petry がいうように、“She couldn't sleep well from thinking about him but she discovered it was fun to think about him too”(356) というところは、性的な空想のことであろう。いっぽうジムは共和党やその大立物であるジェームズ・ブレイン (James G. Blaine) についてスミスと話をしたり、ランプのもとでいくつかの新聞を読んでいたりする。しかしこれはあくまでもリズの目から見たジムの姿なのであって、彼女の空想の中でジムの知的な人物と促えている。このような誤ったイメージはリズの世間の見方の甘さ、人間の見立てについての浅薄さを示唆しており、現実のジムとの落差がまもなく彼女にとってきびしい体験となるのである。

彼女の空想の世界と現実の世界が接触するとき、現実には彼女の空想のなかの期待と同じではない。それは3人の男達がシカ狩から戻ってきたときにはっきりするのだが、それはそっけないほど端的に、明瞭な対比で述べられる。“. . . she was sure it would be something. Nothing had happened. The men were just home, that was all”(60). しかしだからといって、それは彼女にとって現実のジムの等身大に見据える契機となるに十分なものではない。読者にこのことがなんとなく見えてくるのは、狩から3人が戻った日の晩の描写を読んだあたりからである。男達は狩に持参していったウイスキーの残りを飲んで気炎を揚げろのだが、ジムがそ

のビンを荷馬車に取りにいて戻る途中、彼はだらしない酒呑みの振舞いを見せる。“Jim took a long pull on his way back to the house . . . . Some of the whiskey ran down on his shirt front”(61). この不謹慎さをリズの空想のなかの彼のイメージと比較してみれば、男を見る彼女の視線と現実のズレが一層露呈される。リズはそもそもとてもきれいな女性であり (Mrs. Smith, . . . said Liz Coates was the neatest girl she'd ever seen), “She [Liz] liked it about how white his teeth were when he smiled. She liked it very much that he didn't look like a blacksmith”(59)とあるように、清潔な人に惹かれる。

男達は山中にシカを追うという猟の楽しみを味わったが、それには一方で困難も伴ったはずである (“All the men had beards . . . [60]”). したがって今この居心地のいい、あたたかい食べ物がある家に帰ってきたことは、男達にとってはなによりも嬉しいことだった。彼らはウイスキーを飲み、陽気になり、大いに食べて満足した(61)。スミスが自室に引き上げてしまうと、リズにはやがてジムも腰を上げるのがわかっている。彼女の内部に無意識ながら生まれつつある性的欲望は大きくなりはじめ、妄想というべき想念が彼女の頭のなかを支配し始める。

She didn't want to go to bed yet because she knew Jim would be coming out and she wanted to see him as he went out so she could take the way he looked up to bed with her.

She was thinking about him hard and then Jim came out. His eyes were shining and his hair was a little ruffled. (61)

ここに至ってもまだ彼女には自分の頭の中の像とジムの具体的な欲求との落差が認識されていない。彼の求める性的欲求は、彼女のなかでロマンチックなフィルターにかけられている。そのため、彼が椅子に座っている彼女を後ろから抱きすくめたとき、彼女はこう思っただけであった。“He's come to me finally. He's really come”(61).

彼女のなかで育ちつつある欲求が彼女に認識されるのは、ジムのキスによって鋭い痛みに似た感じを味わったことを契機とする。“It was such a sharp, aching, hurting feeling that she thought she couldn't stand it . . . . and then something clicked inside of her and the feeling was warmer and softer”(61). そしてジムに誘われるまま、彼女は彼と外に出てゆく。このときリズはキッチンに掛けていたコートを持って外に出るのだが、Petryはこの動作をリズの本能的な防御の印と読んでいる(358)。Petryの解釈の仕方ではストーリーの最後までリズの純真さを絶対的なものとして考えるがために、彼女をあたかもレイプの被害者であるかのように同情的に見ている。その読み方を押し通そうとするために、交渉を終えた後眠りこんでしまったジムの夜の冷たさから保護しようとしてリズが自分のコートを掛け、まわりをたくしこむ行動を、“. . . a last gasp of maternal impulse which had previously surfaced as a desire to cook something special for him”(358-9)と中途半端な解釈をしている。

ヘミングウェイの意図はそうではない。リズが被害者であるという意識で書いたのではなく、むしろジムによってロマンチックな人間観は現実を冷厳に見つめる見方へと訂正されていく過程を描いたものである。それを可能にしたのは彼女の肉体的欲望の身覚めであって、二人が岸辺の倉庫の陰に座ったとき彼女の感じた二つの感覚 (cold ; hot) はそれを伝えている。“It was



cold but Liz was hot all over from being with him” (62). 現実には彼女が考えていたものよりはるかにきびしいものであることを代弁しているのは、二人がいま座っている船着き場の板の堅さである。“The boards were hard. Jim had her dress up and was trying to do something to her. She was frightened but she wanted it. She had to have it but it frightened her” (62). したがってジムがリズの上に乗ったまま眠り込んでしまってから、最後にリズがコートをジムの体にかけてやり、縁をたくしこんでやるという仕草は、現実を知って受け入れてゆくリズの姿を象徴すると読むべきであろう。

ヘミングウェイのスケッチ (“PAULINE SNOW”) からわかることは、著者がホートン・ベイの人々の描写を意図していたことである。原稿 (Item 801) からわかることは、彼のモチーフの一つは性行為の前後の女性の意識ということであった。したがってこの作品はこれら2つが原点となって、少女趣味的女性が荒々しい現実に合わせてゆく過程のありようを作品化したものである。さらに、これら2つの原点が作品へと結実してゆくことを可能にしたものは、ポーリーンをリズに、アートをジムに変え、さらにアートの人格をデフォルメしてジムという人物像を作り上げた技術、つまりファクトからフィクションへのテクニックにあるのである。この人物像の変化の着想が、ジムとリズのコントラストを生みだし、それがこの1編をストーリーとして独立したものにする上で貢献しているのである。

## 注

<sup>1</sup>ビルがヘミングウェイ宛に出した手紙のうちここで関連があるのは、1919年11月7日付けと同年同月13日付けの2通である (Kennedy Library)。Reynolds の “Looking Backward” を参照のこと。

<sup>2</sup> “[Stein said] it is *inaccrochable*. That means it is like a picture that a painter paints and then he cannot hang it when he has a show and nobody will buy because they cannot hang it either” (Hemingway *A Moveable Feast*, 15).

<sup>3</sup>引用は *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway* (New York: Scribner's, 1987) に依った。これより引用はページ数のみを本文中にカッコに入れて示す。

<sup>4</sup>拙著「ヘミングウェイの短編小説作法—— “The Battler”」『上越教育大学研究紀要』第11巻第2号1992: 223-36を参照のこと。

<sup>5</sup>Ernest Hemingway, ts, items 799, 800, 801, Kennedy Library.

<sup>6</sup>この下段の部分はそのほとんどが Smith によって引用されている。Paul Smith, “Hemingway's Apprentice Fiction: 1919-1921,” *American Literature* 58, December (1986): 574-88.

## Works Cited

- Baker, Carlos. *The Writer as Artist*. Princeton: Princeton University Press, 1972.  
 —. *A Life Story*. New York: Scribner's, 1969.  
 Fenton, Charles A. *The Apprenticeship of Ernest Hemingway: The Early Years*. New

- York : Farrar, Straus and Giroux, 1975.
- Griffin, Peter. *Along with Youth*. New York : Oxford University Press, 1985.
- Hanneman, Audre. *Ernest Hemingway : A Comprehensive Bibliography*. Princeton : Princeton University Press, 1967.
- Hemingway, Ernest. *A Moveable Feast*. New York : Scribner's, 1964.
- . *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. New York : Scribner's, 1987.
- . Ts. Items 799, 800, 801. Kennedy Library.
- Montgomery, Constance C. *Hemingway in Michigan*. New York : Fleet Publishing Corporation, 1966.
- Ohle, William H. *How It was in Horton Bay*. Horton Bay : n. p. , 1989.
- Petry, Alice Hall. "Coming of Age in Hortons Bay." *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Ed. Jackson J. Benson. Durham : Duke University Press, 1990. 353-59.
- Reynolds, Michael. *The Young Hemingway*. Oxford : Basil Blackwell, 1986.
- . *Hemingway : The Paris Years*. Oxford : Basil Blackwell, 1989.
- . "Looking Backward." *Critical Essays on Hemingway's "In Our Time"*. Ed. Michael S. Reynolds. Boston : G. K. Hall & Co., 1983.
- Sanford, Marcelline Hemingway. *At the Hemingways*. Boston : Little Brown and Company, 1962.
- Smith, Paul. *A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Boston : G. K. Hall & Co., 1989.
- . "Hemingway's Apprenticeship Fiction: 1919-1921." *American Literature* 58 December. 1986 : 574-88.
- Smith, William. Letter to Ernest Hemingway. 7 Nov. 1919. Kennedy Library.
- . Letter to Ernest Hemingway. 24 Jan. 1920. Kennedy Library.
- Waldhorn, Arthur. *A Reader's Guide to Ernest Hemingway*. New York : Farrar, Straus and Giroux, 1972.

## A Study of Hemingway's Art of Short Fiction —— “Up in Michigan”

Toshihiro MAEKAWA\*

### ABSTRACT

When young, Hemingway lived in Horton Bay, a very small town in Northern Michigan. He wrote a short story with the town as its setting, using actual people as its models. Critics who discuss this story have argued that this was written after Hemingway moved from America to Paris in 1919, which (later, turned out to be incorrect) misled them into thinking that the story showed direct influences from Sherwood Anderson and Gertrude Stein. Recently, however, several new findings were made about the typescripts of this story and, based upon these new facts, a new reading of the story is possible. In this essay I have tried a new approach to the story.

---

\* Division of Languages : Department of Foreign Languages